

楠見 孝(1995). 比喩の処理過程と意味構造. 東京：風間書房.

佐山 公一

本書は著者楠見孝氏の博士論文を公刊したものであり、学生時代から数え14年間にわたって楠見氏が公表してきた認知心理学的な実験・理論をまとめたものである。

本書には、そのはしがきにもある通り、比喩の処理の過程と、それを支える単語の意味的知識の構造に関する実験がまとめられている。

本書は6章からなる。1章の序論に続き、2章では、「直喩と隠喩の処理過程と意味構造」が、3章では、「直喩・隠喩における構成語の意味変化」が述べられている。また、4章では、「共感覚比喩の処理過程と情緒・感覚的意味構造」が書かれている。さらに、5章では、「提喩・換喩の処理過程を支える意味構造」が述べられている。そして、6章では、直喩と隠喩の理解、共感覚比喩の理解、および、提喩と換喩の理解が共有する処理過程と意味構造を説明するモデルとして「多重意味構造モデル」が提案される。

1章で触れられているように、本書では、比喩の処理に関わる単語の意味として、「カテゴリー的意味」、「情緒・感覚的意味」、「スクリプト的意味」の3種が仮定されている。カテゴリー的意味は、「辞書的意味であり、定義的意味、外延的意味と呼ばれる意味とほぼ重なる(p.21)」。カテゴリー的意味は、上位・下位関係や典型性のような関係を含む。また、情緒・感覚的意味は、「美しい、きれいななどの性質、

評者所属：小樽商科大学商学部 社会情報学科。

状態を表す形容詞、形容動詞、動詞で表現できる意味(p.22)」である。さらに、スクリプト的意味は「場面や出来事の順序に関する意味(p.23)」である。

2章以降、これら3種の意味が上述の各種比喩の処理過程において参照されるという主張を確認する実験が列挙されていくことになる。

2章では、まず直喩および隠喩の処理過程に関する従来の理論が紹介される。そして、「心は沼だ」のような、「AはBだ」の文形式をとる隠喩文の中でのAとBの類似性判断に、A、Bそれぞれの意味特徴の顕著性(目立って感じられる程度)がどのように関係するかを調べた実験(実験1)が述べられる。重回帰分析を駆使した分析から、A、Bの意味特徴の顕著性がB側で高くA側で低い状態になる場合にA、Bの類似性が高いと判断される、というOrtony(1979)のsalience imbalance modelを支持する結果が示される。

続いて、AとBとの間の文から切り離れた意味の類似性が比喩の良さの判断にどのような影響を及ぼすかを調べた実験(実験2)が説明される。AとBのカテゴリー的意味、情緒・感覚的意味、および、「微笑はさざ波のようだ」のような「AはBのようだ」の形式の直喩文の良さ、理解しやすさが調べられ、二つの意味と良さとの関係が分析される。パス解析が施され、良い直喩と判断されるに至る二つのパスがあることが示される。その一つは、AとB

のカテゴリー的意味が似ていないため「A は B のようだ」の文が面白い直喩と判断され、その面白さが原因となって、良さが高まるパス、もう一つは、A と B の情緒・感覚的意味が似ているため、理解しやすいと判断され、その理解しやすさが原因となって良さが高まるパスである。この結果から、直喩・隠喩の処理過程と意味構造を説明するモデルとして、カテゴリー的意味と情緒・感覚的意味の二重の構造を有する二重意味構造パスモデルが提案される。

3章では、「A は B だ」の文が隠喩として理解される場合に、A および B の顕著性がどのように変化するかが SD 法を用いて調べられる(実験 6)。隠喩的理解に伴う A、B の意味特徴の顕著性の変化は、この本の中では「意味変化」と呼ばれる。B の顕著な意味特徴が、対応する A の意味特徴を顕著にするという salience imbalance model に沿う実験結果が提示される。

4章では、「甘い音」、「冷たい色」のような、ある感覚に属する名詞をそれとは異なる感覚を表す形容語で修飾した名詞句の理解しやすさが、触覚→味覚→臭覚→聴覚・視覚という五官の系統発生方向(あるいは近感覚から遠感覚への方向)と一致するかどうか調べられる(実験 9)。すなわち、修飾する形容語が低次の五感を表すものであるほど、また、修飾される名詞が高次の五感を表すものであるほど問題の名詞句が理解されやすくなるか否かを確認する実験が示される。

5章では、「赤ずきん」で「赤ずきんをかぶった少女」を表すような換喩、および「花」で「桜」を示すような提喩の処理の過程とその過程が参照する単語の意味構造が、換喩／提喩表現からの連想を、それら表現を構成する個々の単語からの通常の自由連想と比較することによって調べられる(実験 11)。従来から、換喩／提喩的理解では、全体・部分関係にもと

づき当該名詞の全体概念(または部分概念)が参照されたり、上位・下位関係にもとづき上位概念(または下位概念)が指示されたりするとされている。実験では、このことを確認するとともに、換喩／提喩的理解では、より一般的に、全体・部分関係を含むスクリプト的な意味関係が参照されることが指摘される。そして、換喩／提喩表現が単なる慣用的表現ではなく、文脈やその表現の置かれた状況によって指示対象を変える場合があることが説明される。たとえば、「白いもの」からは「雪」が最も多く連想されるが、「頭に白いものが混じる」からは「しらが」が最も多く連想される。ただ、このことは、換喩／提喩的理解に、文脈・状況の知識に照らし照応関係を認定する過程が含まれることを示していると考えられるが、それに関する言及はない。

最後の 6 章では、各種比喩の処理過程を包括的に説明するモデルとして、二重意味構造パスモデルを拡張した「多重意味構造モデル」が提案される。このモデルは、情緒・感覚的意味、カテゴリー的意味、スクリプト的意味の三つの意味をすべて引き出すことができるようになっている。

この多重意味構造モデルには、そもそも言語表現を理解した結果得られる意味というのが、多種多様な知識からなるいくつかの知識源を参照した結果得られる、多層的な意味の総体であるという主張が込められているように評者には読み取れた。すなわち、比喩も言語表現である以上、その理解の結果得られる意味も多層的な意味の総体であるということを書は主張しているように受け取れた。

一通り読み終えたあとで、素朴な疑問がわいた。本書の実験で対象とされている言語材料は、「A は B (のよう) だ」形式の文であったり、形容語によって修飾された名詞句であったり

り、「A を B する」形式の動詞句であったりする。表現の形式あるいは単位が違えば、質の異なる処理が施されて当然であるが、そのことが本書では問題にされていない。楠見氏がこの点をどのように考えているのか知りたいと思った。

楠見氏は日本における比喩理解の認知心理学的研究の分野のパイオニアであり、氏の行ってきた本書の比喩の実験研究は質・量ともに秀

でている。加えて、アリストテレス以来 2000 年の歴史をもつ比喩の研究が、認知心理学や認知科学においてどのように扱われるようになったかを知るうえで、本書はその優れた概説書ともなっている。これらの点において、これから比喩の理解あるいは広く言語の理解の研究を始めようとする認知心理学、認知科学の研究者にとって一読に値する書物であることは間違いのないところであろう。